



▲斐伊川は素戔鳴尊が降臨したとされる船通山(せんつうざん)を水源に奥出雲町、雲南市を経て宍道湖に注ぐ

安来～奥出雲～雲南 たたら製鉄の軌跡をたどる

やすぎ
安来市から奥出雲町、雲南市の一带は、古来からの製鉄法「たたら」が盛んな地。豊かな風土がたたらを育み、そしてたたらが独特の景観や文化を育んできた。今もこの中国山地の山ふところに息づく、たたらの息吹を訪ねてみよう。

古代から受け継がれ、発展した伝統的産業

神話の国、出雲。出雲空港に近い宍道から南へと道をたどり、中国山地へと分け入った奥出雲地方(雲南市、奥出雲町などの一带)は、素戔鳴尊すさのおのみことの八岐大蛇退治の舞台だ。実はこの話、八岐大蛇は氾濫を繰り返した斐伊川を表し、尾から剣が出てきたことは斐伊川上流一帯で製鉄が行われていたことと関係しているという説がある。実際、『出雲国風土記』(733年)の仁多郡にたの記述部分には「諸郷もろちゆうのさとより出すところの鐵てつ堅くして、尤も雑くさぐさの具ものを造るに堪たふ※1」とあり、8世紀前半の時点ですでにこの地の鉄が名高かったことをうかがわせる。

大陸から伝えられたたたら製鉄は、最初は中国山地の南側で行われていたが、原始的な野だたらという方法から次第に改良が加えられて炉が大型化し、生産性が向上するにつれ、良質な砂鉄と炭を作るための森林資源が豊富な中国山地の山あいへと中心が移っていった。江戸時代になると松江藩の庇護のもと、藩からお墨付きをもらった鉄師がそれぞれ大規模にたたらを経営する

ようになる。たたらを設置した高殿という建物の周りに、鉄を鍛える大鍛冶場や製鉄の神を祀る金屋子神社かなやご、たたら操業に従事する専門職人集団の住まいなどが集まって山内と呼ばれるたたら集落を形成した。最盛期には全国の鉄の80%以上が中国山地で産出され、うち奥出雲地方がその半分近くをまかっていたという。

先人の知恵とノウハウを集めた製鉄法

安来の「和鋼博物館」には、近世のたたら製鉄に使われた永代たたらの原寸大模型と築炉の説明図が、また奥出雲の「奥出雲たたらと刀剣館」にはたたらの断面モデルがある。これを見ると、地上に見えているのは粘土で作られた四角い炉※2とふいごだけだが、実は地下に複雑かつ巨大な構造が隠されていることに



▲日刀保たたらは、年に3～5度操業している。造り上げられた玉鋼は、現代の刀匠たちの元へ送られる。写真/公益財団法人日本美術刀剣保存協会

※1 「村々から産出される鉄は堅く、諸道具を造るのにもっともふさわしい」といった意味
※2 気密な空気に圧力を加えて、風を作り出す装置



▲製鉄の神を祀る金屋子神社



▲菅谷高殿。唯一現存する高殿
※3 本年11月まで保存修理中



▲和鋼博物館(右)の炉とふいごのモデル



驚かされる。粘土層を巡らして地下水の浸入をシャットアウトし、木炭を詰めた本床と呼ばれる炉床や空洞部を設けて、高い乾燥度と保温性能を確保しているのだ。

炉はこの地下構造の上にたたらを操業するたびに築かれる。操業は3日かかりだ。まず炉に木炭を入れ、炉の横側の穴からふいごで風を送り込んで燃烧させて温度を上げ、そこへ砂鉄と木炭を交互に投入していく。昼夜間わすの過酷な作業に支えられて、炉の中で鉄が還元され、まず炉の土の成分と砂鉄中の還元残渣が反応してできたノロ(鉄滓)が、次に「銑」と呼ばれる炭素量が多い鉄が流れ出てくる。銑押しと呼ばれるこの操業法に加えて、炭素量の低い玉鋼を含む鉄塊「鉾」を炉の中に生成させる方法もあって、これは鉾押しと呼ばれた。銑や、鉾の中でも炭素量の多い部分は、鍛錬を加えて炭素量を調節し、農機具や大工道具、包丁などに使う錬鉄が造られた。

明治維新後もたたら製鉄は健在だったが、釜石や八幡(福岡)に洋式高炉が築かれて格段に効率よく鉄鋼が生産されるようになると、たたらは次第に衰退に向かった。そこで危機感をもった出雲と伯耆(鳥取)のたたら経営者は、共同出資して安来に鉄鋼会社を設立した。これはこの地ならではの特殊鋼製造へとつながり、後にその会社を引き受けた日立金属株式会社安来工場によって、「はがねの町安来」の伝統が今に受け継がれている。

また、1977(昭和52)年には、公益財団法人日本美術刀剣保存協会が、日立金属の協力によって奥出雲町にたたらを復興している。美しい刃文を見せる伝統的な日本刀製作には、鉾に含まれる玉鋼が欠かせないからだ。



▲土砂と砂鉄を分けた、鉄穴流しの遺構



▲地下構造がわかるたたら断面モデル



▲鉄穴流し跡に拓かれた棚田風景

たたら製鉄が今に遺し、私たちに示すものとは

奥出雲地方を行くと、山ふところの丘陵地に棚田が続く田園風景が次々に目の前に現れる。棚田の広がり、まるで丘の頂を切り取って均したかのようだ。「こうした田んぼは、実はかつて鉄穴流しが行われた場所に拓かれたものです」と教えてくれたのは、奥出雲町神話とたたら里推進室の尾方豊さん。鉄穴流しとは、砂鉄採取のシステムで、山土を切り崩して水路に流し込み、比重で砂鉄を選鉱する。奥出雲町では、実は棚田の多くが鉄穴流しの跡地を利用して作られ、水路などもそのまま活用されているのだという。この地の米は仁多米として高い評価を得ているが、それもこうして拓かれた広大な棚田があってこそなのなのだ。

また、たたらで使う木炭は周辺の山の木を焼いて作られた。一つのたたらで年間の操業に100ヘクタールもの森林を必要としたというが、雨の多いこの地では、30年経てば再びたたら操業に使える森林が再生するため、長いスパンで順繰りに伐採することで森林資源は守られてきた。「たたら製鉄は、砂鉄と木炭、粘土で築いた炉、ふいごの風で燃やす火という自然に近いものによって成り立ってきた産業。自然と共生し、永続的に循環させていく先人たちの知恵のたまものです」と、尾方さんという。

奥出雲町には、鉄師絲原家と櫻井家の広大な屋敷やそれぞれに伝わる美術工芸品が、今も往時のたたら経営とその繁栄を伝える。また雲南市の吉田には最大の鉄師だった田部家が1750年代から1921(大正10)年までたたら操業していた高殿やたたら従事者の住居、番頭が詰めていた元小屋などたたら集落である山内が現存し、たたらが育んできた文化を今に伝えている。効率や採算性に劣ることから、廃れてしまったたたら製鉄。しかし、そのあり方は人と自然との関係を考える上で示唆に富み、たたら製鉄が育んできた景観や遺構は、かけがえのない貴重な文化的遺産なのだ。



◀奥出雲たたらと刀剣館の八岐大蛇モニュメント。向こうに船通山を望む

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふあみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



出雲の名物出雲蕎麦と、その味を支えた奥出雲産ソバの話題などを紹介。